

## もど子と人婦

號一十第卷四第

### 兵卒フリッツ

やまとの翁

今いまから大方四十年程ねんほどまへ前に、獨ひと逸いっと佛蘭西ふらんすとで、ひどい大戦おほいさまをしたことがあります。其戦そのいくさについて面白いお話おもしろいお話がありますから、今度こんどは一つ其お話そのお話をして見みまし

よう。

獨逸の軍隊に一人の軍曹がありまして、其子に兵卒フリッツといふのがありました。家はブランデンブルヒといふ所です。小さい時から、いつも兵卒のお遊ばかりします所から、誰もかも、兵卒フリッツ、兵卒フリッツ、といふ様になって、自分でも、大變そういはれるのを喜んで居ました。

フリッツのお父さんは、佛蘭西との戦争の間、ラインといふ河の側の聯隊に付いて居ました。或日のこと、お父さんが、そこから家へよこした手紙に、戦争中、別に欲しいものとはないが、時々野菜がなくなつて困るといふことを書いて、其端に、

あゝ、どうかして家に在るいく馬鈴薯の一袋もあつたもんなら、



皆が、どんなに喜んで食べるかも知れないよ。

と、いつてかいて居ました。

夫を聞いて、兵卒フリッツは朝晩、お父さんのことばかり、思ったり、夢に見たりしました。夫から、或日のこと、お母さんに言はないで、そつと家の納屋から、よりぬきの上等の馬鈴薯を袋に一抔詰め込んで、とうく夫を持ってお父さんを尋ねに出かけました。

さて、其日の晝頃になって、或町までやって来て、其處の宿屋に倚つて休みました。すると、そこには澤山なお客が居ました。そして其中に、一人の跛の年老つた兵隊が居つて、のそりくとフリッツの方へ歩いて来て、そして不思議そうに、フリッツの頭の尖から足

の尖まで見上げたり、見下したりして、

「お前、何しに來たのだ」  
と尋ねました。

すると フリッツは、

「僕は之から、ラインへ行く所なんです。僕のお父さんは、今度陞級して軍曹になったのです。然しお父さんは、そんな事はどうでもよいが、馬鈴薯のないのが一番困るといつてきました。だから、僕は少しばかり持って行ってやらうと思つて、一番いゝのをよりぬいてもつて來ました。この袋の中に入つてゐるのがそうです」

といひますと、兵隊は

「や、こりや感心だ、夫が眞實なら、どれくも一度いつて見てくれ、どういふんだって」

フリッツは又始から咄しました。そうして皆のお客さんも耳を立てゝ聞いて居ます。其お話がしまうといふと、今度は、彼の年老つた兵隊の目からぼろく涙がこぼれて居ます。勿論、他の人たちも残らず感心していました。

そこでその兵隊は、

「あゝ、お前は眞實に兵隊の子だ、私は、もうお前を見ると、何だか嬉しくつて胸がどきくしてしようがない位だよ」

といつて、しきりに、フリッツの頭を撫でゝ居ますと他のお客さんたちも皆側へやつて来て、しきりと可愛がつて居ます。こん

な風で、今日はもう皆で以って、フリッツを前へやらうとはしないで、とうく其晩は其宿屋に止らなければならぬ様になって、フリッツは丸で、殿様の子か何かの様に大事にせられました。夫から夕方になって、又新しいお客がくると、フリッツは又其お話をする、とうく夜になって、奇麗なお座敷で美しい柔なお布團を取って貰って、くたびれたまゝ、ぐうく寝て仕舞ました。フリッツが寝て居る間に、彼の年老った兵隊が、皆のお客に咄してこんな豪い子供を一文なしに此先を旅させるのは吾々の耻だないかといつて相談しました處が、そうだくといつて、皆吾前にと財布からお金を出しました。夫で、宿屋の主人が、翌朝まで、其お金を預って居って、朝になってから、フリッツを起し

て甘い朝で飯を食べさせて。そして、夕のお金を、上衣の縁に縫ひ込んでくれました。

そこで、フリッツは皆にお禮をいって、そこを出まして、トットと歩いて行きました。夕方になって、又他の宿屋について、そこでも又前のお話をして皆から、大層大事にせられました。こういふ風で、幾日もくく旅行をして、とうくお仕舞ひに、遠くから、獨逸軍の第一歩哨を見付けましたから、丸で飛ぶ様な勢で駈て行って、いきなり問ひました。

「私のお父さんは何處に居るか知って居ますか」  
すると哨兵は

「何だ馬鹿奴が、お前、己がお前のお父さんの名前を知ってる



と思ふのか？そして、どこの聯隊に居るのか」

「あ、そーだった、ブランドルブルヒ聯隊です 名前はマルチン、ポ  
ラマンと書いて軍曹です」

「そーか 夫が眞實なら、よし、通って行って尋ねて見るがよい」  
フリッツは、そこを走り抜けて行って、こんどは第二第三と歩哨  
線を通って、とうく聯隊副官の處へ行きました。すると副官は  
こまかにフリッツを吟味して見ましたが、フリッツの話の聞けば  
聞くほどだんく親切になつて来て、

「よし、私について来い、索したらすぐ知れるに違ない」

それから、副官について行くと、今度は、大きな立派なテントの  
處へ来ました。其テントの上には廣い聯隊旗が勇ましく風に翻つ

て居ます。フリッツはもう嬉しくって嬉しくって、にこ〜顔で副官の側について指圖の儘に、恐ろしげもなく、テントの中に這入りました。見ると、そこには、大分年の老った、立派な軍服を衣て、胸には幾つもの勳章がピカ〜して居る一人の將校がテ〜ブルに向つて、大きな腕かけ椅子に腰かけて、しきりと地圖を見て居る様です。そして副官の這入つて來たのを見て、たゞ一寸顔を擧げて、副官が、五六歩前に立ち留つて、丁寧にした擧手の禮に向つて僅かにうなづいて居るのです。

「こりゃ屹度司令官に違ない」

フリッツは入口に立つて考へて居ます。

フリッツの考へ通り、此將校は軍司令官でした。副官は恭々しく

進んで行って、低い聲で、司令官に話しました。すると司令官は急に眼を地圖から離して、副官の咄に耳を傾けながら、時々、忙がはしくフリッツの方を見て居ましたが、やがて、お話がすむと副官に何か命令を與へて其場を去らせて、さて、フリッツに向つて柔しい目配せをしましたので、フリッツは、すぐ進んで行って丁度兵隊の姿勢で其前に真直に立ちました。

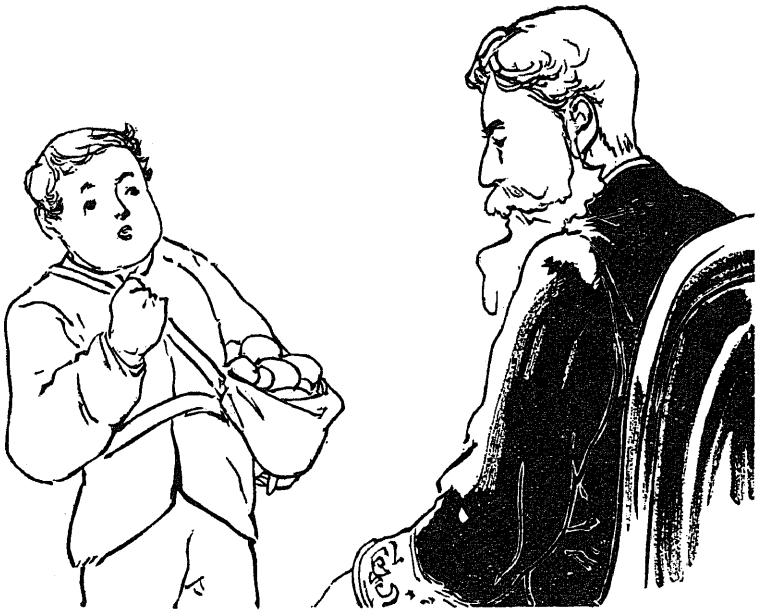
司「お前、名は何といふ？」

フ「フリッツ、ボラマンです。又兵卒フリッツともいひます。

司令官はニツユとして

司「どこから来た？」

フ「ブランデンブルヒから」



森田

司一體、何をしに來たのかね

「お父つあん所へ馬鈴薯をもつて、

「ハテ、これは眞實かな」と司令官

は自分で獨言をいって

司「じやあ、お前、其馬鈴薯とい

ふのを、そこに袋の中に入れ

て持つてるのだね」

「ハイ、納屋の中で一番いゝの

を持って來ました」

そう云つて、フリッツは、袋を肩

から下して、中を開けて見て

「マー 一寸御覽下さい、この通りみんなまるくして、小石の様に滑っこいんです」

司「あゝよし、なる程見事だ、どれもこれも甘そうなの許りだ  
そこで、お前は暫らくの間、次の間へ行つてゐてくれぬか、  
その中私が呼ぶから、そして少しの間、その馬鈴薯をこゝへ置  
いておいて欲しいものだ」

フリッツはいはれるまくに、次の間へ行つて、その大きな腕か  
け椅子に腰かけましたが、まもなく、こくりくと座眠り始めま  
した。一日中歩き通した足勢もありますし、わけては、こゝへ着  
いて安心した故でもありませんよ。で、司令官が、一時間もたつ  
てから、這入つて来た時は、フリッツは、さも心地よさうに寝

入て居りましたから、其儘寝かせて置いて、司令官は又そーと出て行かれました。

さて、フリッツが、何も知らないで寝こんでしまつて居る中に司令官は、フリッツの爲めに、いろく骨を折つて、とうくお父っさんのマルチン、ボラマンを探し出して、それから今晚、大將の陣で夕飯を御馳走するから出てくる様にと命令を傳へまして、同時に上の方の將校も残らずお招きしました。(つゞく)

